

(国語科)

どの子にも「わかる・できる」国語科の学習
—正しく読む力の育成をめざして—

大阪市立今福小学校 研究部

1. 研究主題設定の理由

本校の児童は、体験学習などの学習には楽しそうに取り組むが、学習内容が複雑な場合や学習量が多い場合は、すぐにあきらめてしまうことがある。宿題などの家庭学習に取り組むことも困難となり、学習に苦手意識のある児童は、さらに学習に対して苦手意識が増すという状況にあった。

「学習理解度到達診断」や「全国学力・学習状況調査」などの学校全体の傾向としては、学習の二極化が進み、厳しい状況であった。

この厳しい状況を改善しようとして、少しずつ基礎学力向上のため系統立てて学習できるように、授業の改善を学校全体で取り組むようにしてきた。

また、全学年で国語科アンケート調査を実施して児童の実態の把握に努めた。その結果、「文を読んだり、意味を考えたりするのが苦手」「漢字が苦手」「音読で人前で読むのが苦手」等意見が多数あり、「読む」ことに課題があることが明らかになった。

その実態を踏まえた上で、全ての学習の基礎となる国語科の「読む」ということに軸を置き、児童が意欲を持って学習に取り組めるように「どの子にも『わかる・できる』国語科の学習—正しく読む力の育成をめざして—」という主題を設定した。

2. 研究の内容と方法

(1) どの子にもわかる・できるための工夫

ユニバーサルデザインの3つの視点「焦点化」「視覚化」「共有化」が活用しやすいと考えた。これら3つの柱に沿って指導方法の検証を行った。

1つ目の柱である「授業を焦点化（シンプルに）する」では、まず、学習課題や発問、指示が児童にとってわかりやすいか、また、児童の学びを促すものになっているかどうかを確かめるようにした。

2つ目の柱「授業を視覚化（ビジュアルに）する」では、児童の「気が散らない環境作り」と「見てわかる工夫」に取り組んだ。

「気が散らない環境作り」として、授業で使用しない掲示物はできるだけ児童の視野に入らないようにし、本当に必要なものだけを選んで掲示するようにした。

「見てわかる工夫」では、話型や既習事項がすぐに確認できるような掲示物や児童それぞれの考えがわかるような発表ボードなどを準備した。

3つ目の柱「授業を共有化（シェア）する」では、まず、児童に自信を持たせたり、安心させたりすることを意識して授業改善に取り組んだ。そのために共有化へ至るまでの準備として、児童一人一人に自分の考えを持たせ、表現させる場を必ず設定することや聞き方・話し方の練習を十分に行うようにした。

児童それぞれが読んだ内容が正しいものであるかを互いに確かめることによって、どの児童も「わかる・できる」読みにつなぐことができるようにした。

(2) 学校での取り組み

発達段階に合った指導や学校全体の取り組み、小規模校ならではの活動について、実践し検証を行った。

① 書く姿勢、鉛筆の持ち方指導

書く姿勢、鉛筆の持ち方指導については、出前授業で講師を招聘し、「クジャク法」を用いて、どの子も正しい鉛筆の持ち方ができるように指導を続けた。

② 音読と視写の取り組み

音読カードを用いて家庭学習で音読をさせるようにし、授業では声の出し方、本の持ち方、正しい姿勢等の指導を継続して行った。

③ 今福漢字検定

1年生から学習する漢字のテスト（漢字検定）を行い、書けなかった漢字について復習を行い、検定に合格したら次の学年に進むシステムにしている。

④ 読書タイム・読書指導

一人一人に読書ノートを持たせて取り組んでいる。学校図書館補助員や地域図書ボランティアの来校により、図書室の整備や読み聞かせの時間が充実している。また、児童が自由に図書室を使用できる時間の確保に努めている。

⑤ 話型とハンドサイン

学級会活動で行っていたハンドサインを使いながら話型にも取り入れ、各学年で使えるように取り組んでいる。

⑥ 縦割り活動

本校では、縦割り活動を積極的に行っている。内容としては、言語活動が取り入れられるように意識して取り組んでいる。

⑦ 「月6タイム」「水5タイム」

「月6タイム」では、5年生対象で1クラスを4つの習熟度別クラスに分けて国語と算数の基礎・基本となる学習を行っている。基礎・基本の確かな学力の定着に向けてこれまで学習した内容を振り返る時間として設定している。「水5タイム」では、4年生対象で1クラスを3つの習熟度別クラスに分けて国語と算数の学習内容の復習を行っている。

3. 研究の成果と今後の課題

アンケート結果から、児童の意見として、「読めない漢字が出ても、調べたらわかるようになった」「説明文を読んで知らなかったことを知ることができた」「国語が楽しくなった」など、児童のできた・わかったという意見を得ることができた。

ユニバーサルデザインの視点から、焦点化について、必要な内容に絞って精選し取り組んだ。その結果、児童が混乱することなく授業に参加できた。視覚化については、ホワイトボードや教室の側面の壁などに掲示することで、すぐに振り返ることができ、筆者の表現方法やだいたいの言葉の意味をすぐに確かめることができた。一方で、授業に関係のない掲示物を黒板周りから取り除くことにより、黒板に注目しやすくなり集中して取り組むことができた。共有化については、学習に苦手意識をもつ児童が、友だちの様子や発言を共有することで学習した内容を理解することができた。

さらに支援を進めるために、特別支援学級担任との共同作業で進めた。見通しを持たせることや、視覚的支援等きめ細かく支援することができた。

今後の課題として、国語科で一定の成果を上げることができたので、他の教科や領域にも「どの子にも『わかる・できる』」指導を展開していきたい。